



それでは人が育つわけがない、もう木挽きは終わりだと、林さんはずっと弟子を取らなかった。しかし7年ほど前断ても断つても食らいついてくるひとりの若者に根負けしてついに初めての弟子を持つ。

「私らが小僧だった頃と違って競争相手がいないから、なかなか育ちませんよ」と苦笑いしながら、孫のような弟子を、林さんは静かに指導する。

木が育つには、数百年の時間が必要だ。伐り出された木は数年かけて自然乾燥。木挽きが木を読むのに、数ヶ月。太い木なら、大鋸で切るだけで1ヶ月かかる。木を相手の仕事は、そんなゆつたりとした時間の中で営まれている。若者よ、どうかゆっくり大きく育てよと、私は心の中で十郎を送った。

PROFILE

はやし いち

昭和4年千葉県出身、農家の次男だから、家を出なくちゃならない。木挽きなんて知識も興味もなかったけど、縁があって終戦後ほどなく木挽き職人に弟子入り。3年の修行を経て独立。以来、数え切れない銘木に鋸を入れてきた。日本最後の木挽きと呼ばれていたが、数年前に若者が弟子入り。木挽きの技術はかろつじて命脈を保った。

職人の技

シリーズ 木挽き職人

林以一さん

木挽きは、絶滅危惧技術である。しかしそこには、人が失ってはいけない木への愛と洞察力が満ちている。東京・新木場に、最後の木挽き職人「林以一さん」を訪ねた。

木挽きというのは、丸太を柱や板などの木材に切っていく仕事だ。使う道具は、大鋸（おが）と呼ばれる巨大なノコギリひとつ。木の種類や用途に応じた複数の大鋸で、客の注文に応じて、大黒柱も天井板も床板も、あらゆる木材を切り出す「木のプロ」だ。

「昔は木挽き職人も大勢いたから、大鋸を作る鍛冶屋さんがあつたけど、今では大鋸は自分で手作りです。もともと木挽きの発注自体がほとんどなくなっちゃったけどね」
製材機の登場で、瞬間に

木挽き職人は消えていった。「そりゃ、機械は早いですが、でも機械で削ると、大量の削りかすが出るし、機械の熱で木の中の油が溶けだして、木肌が汚くなる。木挽きが挽くと、木目もきれいに出来ます。そもそも木ってというのは一本一本、全部違います。それをみんな同じように削ったんしゃ、木がかわいそうですよ」

木挽き職人は、木の良き理解者である。実際、林さんの木を読む技術は驚異的だ。丸太を見れば、その木の来歴をほぼ間違いない言い当てることができる。

「50年も木を見ていけば、誰だつてわかります。それがどの土地のどんな木で、南で育ったのか北の斜面か、中に空洞があるかどうか、節の感じはどうなのか。それがわからないと、木は挽けません」

「世の中には、確かに良い木があります。しかし、悪い木っていいのはない。どう活かすかは、使う者のセンス次第。そういう木の面白さがわかったの

は、木挽きになって20年以上経つてからかなあ」

機械全盛の今でも、林さんに挽いてほしい」という客が綿々と絶えないのは、そのセンスに期待するからだ。しかし林さんですら、木を前にして毎回おいに悩むという。

「木を預かると仕事場に置いて、毎日すつと眺めています。6年ほど前、私の職人人生でも最高の木を挽きました。樹齢二千年のケヤキです。こりゃもう宝石みたいな木で、どう挽いたら良いか、半年考えました。結局、これだけの木でしかできない、幅広の板を取ることにしました」

当時の写真を見せてもらつた。直系が2m以上あるうかつかうケヤキから取られた巨大な一枚板は、琥珀色の深い輝きを持つ、まさしく宝石のよう。後にその板は茶室等に加工されたが、その価格が2千万円。丸太の値段は1億2千万円だったという。この高価さが、職人を減らす遠因でもある。

悪い木ってのは、一本もない。使う人間のセンス次第なんです。

「私らはさんざん失敗して恥をかいて、それで木のことを覚えてたものですが、最近はその値段が高過ぎて、若い人たちがおいそれとは挽けなくなつた。失敗を許すゆとりが、今の時代にはなくなつてしまつたんです」



文 = 篠塚義成
text: Yoshinari Shinozuka
写真 = 林 泉
photo: Izumi Hayashi